

地に生きる、地を生かす

地域人

CHIHIKIJIN

第85号
創刊7周年
記念



新連載
片山善博
宮田珠己

連載
養老孟司
北川正恭
小峰隆夫
森まゆみ
二宮清純 ほか

特集

地域とケア

支え合い、助け合う「地域共生社会」

座談会

課題解決型から伴走型支援へ

気にかけることがケアの始まり

村木太郎、小川有閑、高瀬顕功、里見喜久夫

カフェ・デ・モンクえりも 北海道えりも町

認定NPO法人

マギーズ東京 東京都江東区

世田谷区

認知症とともに生きる希望条例

東京都世田谷区

暮らすLaboratory しかのいえ

東京都北区

社会福祉法人みなと福祉会

わーくす昭和橋 愛知県名古屋市中区

NPO法人

くらし応援ネットワーク

愛知県名古屋市中区

NPO法人

埼玉フードパントリー

ネットワーク

埼玉県

テンプル食堂よしざき

福井県あわら市

どーん!と西成 大阪府大阪市西成区

川崎市ふれあい館 神奈川県川崎市

対談

楽しく包みこむケアの場

島園 進×羽塚順子



カフェ・デ・モンクえりも

カフェから始まる

精神障害者の地域活動と

高齢者ケア

東日本大震災の被災地で始まった僧侶たちによる移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」。

北海道の「社会資源が何もない」えりも町から、文句も軽口も笑い合える場が生まれている。

文・佐藤優子 写真・大橋泰之 写真提供・カフェ・デ・モンクえりも

みんなの居場所としても機能する事業所「いろり」の入り口で。後列左より塚田さん、佐野住職、泉祐志さん（診療所のソーシャルワーカー）、前列左より高田さん、柳さん、水野さん、田中さん。

被災地に向き合う 宗教者たち

2011年(平成23)の東日本大震災当日から四十九日も過ぎた頃、甚大な被害を受けた三陸海岸一帯を喫茶店道具一式を積んだ軽トラックが走っていた。乗っているのはお坊さんたち。宮城県栗原市にある曹洞宗通大寺の金田諦應住職の呼びかけで始まった移動傾

三陸海岸 カフェ・デ・モンク。
Monkは英語でお坊さんのこと。
平穩な日常に戻るには
長い時間がかかると思います。
あれこれ「文句」の一つも
いいながら
ちよつと一息つきませせんか？
お坊さんもあなたの「文句」を
聴きながら
一緒に「悶苦」します。

聴喫茶「カフェ・デ・モンク」の面々であった。

当日の様子は2019年に出版された金田住職の著書『傾聴のコツ』(三笠書房)に詳しく書かれている。同じ宮城県でも栗原市は内

陸部に位置するため、沿岸部の石巻市や南三陸町、気仙沼市ほど壊滅的な被害を受けていなかったこと、市内の火葬場に次々とご遺体が運ばれてきたこと、

最初にお経をあげたご

遺体は小学校5年生の女の子二人だったこと、声が震えてお経が読めなくなったこと……。

傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」の看板に書かれているメッセージ。

金田諦應著『傾聴のコツ』(三笠書房)

じきに少しずつ道路状況が改善していくと、四十九日の法要には同じ宗派の僧侶とキリスト教の牧師にも声を掛けて、超宗派の宗教者たちで追悼行脚を行った。それが終わった後も金田住職は被災者たちの話に耳を傾ける傾聴活動を始める。その活動がカフェ・デ・モンクとなり、訪れた先でメッセージが書かれている看板を掲げ、

誰かが椅子に座るのを待ち続けた。

選択肢を奪われた 被災者と精神障害者

このカフェ・デ・モンクの活動が今、北海道の中央南端に位置する人口約4300人のえりも町でも展開され、精神障害者の地域活動や高齢者ケアに生かされている。

「カフェ・デ・モンクえりも」の代表は、「金田さんとは若い頃に

一緒に勉強した仲間なんです」と語る法光寺住職の佐野俊也さん。その佐野住職を支えているのが副代表の高田大志さん。えりも町から

車で1時間の浦河町で精神医療に取り組む医療法人薪水浦河ひがし町診療所副院長だ。なぜカフェをえりもに導入しようと思ったのか、経緯を高田さんが語ってくれた。

「話は少し長くなるんですが、まず僕たち診療所のメンバーが元は浦河赤十字病院の精神科に勤めていたことからお話ししますね。その精神科病棟が2014年に閉鎖されることになり、

「入院や通院している人たちの居場所をなくさない」という精神科医の川村敏明先生と志

を同じくするメンバーで病院を退職し、立ち上げたのが今の浦河ひがし町診療所です」

実は浦河町は、精神医療や社会福祉の分野では頻りに名前が挙がる先進地。1984年(昭和59)に精神障害等を抱えた当事者たちの地域活動拠点として「社会福祉法人浦河べてるの家」が設立されたことは、関係者の間で広く知られている。前述の川村先生もすべて創立メンバーの一人であり、ソーシャルワーカーの高田さんたちスタッフにとってメンターのような存在だ。

診療所にはえりも町から通ってくる人もおり、月に2回は川村医師たちが巡回診療や訪問診療も行っている。というのも、えりも町には「べてる」のように通うところもなければ、グループホームなどの住む場所も、働く場所もないからだ。



副代表でソーシャルワーカーの高田さん。「僕らが『葉飲んだかい?』と聞けば柳さんたちは病人になるし、『最近うまいラーメン食べた?』と聞けばラーメン好きになるんです」

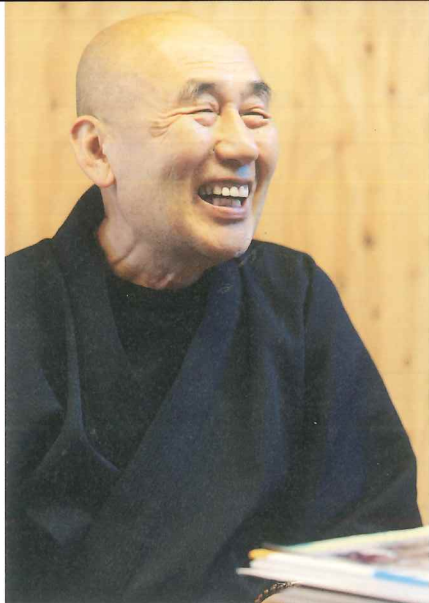


看護師の塚田さん。「病棟ではしてあげる人としてもらう人の関係。暮らしの中で一緒に何かしたかった」

「そういう状況で病棟なしで精神障害者を支えるには、つながらる場が必要だよ」と皆でそう考えていたときに、日赤の精神科病棟で長年フィールド調査を続けていた人類学者の浮ヶ谷幸代相模女子大学教授から自家のカフェ・デ・モンクを紹介されて、すぐに視察に行きました。2015年6月のことでした。そう語る高田さんにそのとき同行したのは、診療所の看護師、塚田千鶴子さんだ。

「何もかもがなくなった被災地にお坊さんが色とりどりのケーキとコーヒーを持って行く。そこに全てをなくした人たちが来て、ケーキを選ぶ。その『自分で選ぶ』という行為を提供している場があることに胸が熱くなりました」

未曾有の事態により人生の選択



佐野俊也（さの・としや）

カフェ・デ・モンクえりも代表、
佛国山 法光寺住職。1953年北海道えりも町生まれ。
曹洞宗大本山總持寺で修行の後、
えりも町に帰り、38歳で住職に就任。
曹洞宗特派布教師として後進の指導にあたる。
カンボジアの子供たちの教育支援を
ライフワークとしている。

肢を奪われた被災者たちの状況は、
社会福祉サービスが限られ、住ま
いや仕事を自分で選ぶことができ
ない精神障害者たちとも重なった。
加えて宮城では県内の在宅緩和ケ
アクリニック岡部医院との連携も
進んでいた。看取りや遺族ケアを
宗教者と医療従事者が横並びで行
う光景を、高田さんたちは目の当
たりにしたという。

「僕たち精神科は『どう生きてい
くか』を当事者と一緒に考えます
が、『どう死を迎えるか』『家族が
亡くなった後、遺族は……』とい
うところまでは手が出ない。そこ
はやはりお坊さんたちの領域なん
です。でもそうやってお互い違っ
た領域にいるからこそ、僕らが宗教
者と組むことで精神医療でも何か
新しいことができるんじゃないか。

えりも版カフェは 当事者も家族も大歓迎

「高田さんから電話をもらうまで
は、精神医療の人たちと関わりと
は思ってもいませんでした」とい
う法光寺住職の佐野俊也さん。

佐野住職の一日は地元の檀家ま
わりから始まる。家族には言えな
い悩みや近況を聞き、とりわけ高
齢者は体調の変化も見守りながら
意識はせずとも日常的な傾聴活動
を続けていた。

その中に一人、連れ合いを亡く
し、「もうダメだ」と何度も口に出
するおばあちゃんがあったという。
「私の勉強不足で、彼女の気持ち
を見誤っていた。口に出している
うちは大丈夫だろうと思込んで
いたんです。彼女の自死は今も私
の中で大きな後悔になっています。
うわべだけでない、本当の声を聞
くことの難しさともう一つ、町ぐ
るみのケアが必要であることも実
感しました」

診療所から連携の話を持ちかけ
られたときは二つ返事で引き受け、
こうして佐野住職を代表とする
「カフェ・デ・モンクえりも」が
結成された。

カフェの場所はえりも町役場交
流館「ひなた」。第1回はさっそく
2015年8月26日に開催された。
診療所に通うメンバーやひきこも
りの人、子育て中の人や一人暮らし
の高齢者にも声を掛け、「誰で
も歓迎」の姿勢を打ち出した。「診
療所のメンバーやひきこもりの人

には「ぜひ、ご家族も一緒にね」
とお願ひしました」と語る佐野住
職。当事者や要介護者と暮らす家
族のケアも、住職が特に力を入れ
たいと思っているところである。

当初はいろいろな企画を用意し
たが初対面同士のぎこちなさもあ
り、どうにもうまく進まなかった。
それならと「居心地のいい場所」
をつくることに専念したところ、

かえって参加者が自発的に動いて
話が弾むようになったという。

カフェの司会は、札幌から9年
間浦河日赤に通っていた柳一茂さ
ん。幻聴が聞こえるようになり、
浦河日赤で初めて「統合失調症」
の診断がおりたという。今は浦河
のグループホームで暮らしている。
「自分はひきこもりも長かったん
ですが、佐野さんから『調える』



北海道胆振東部地震後に開かれた
「カフェ・デ・モンクえりも」。当初は
地元ボランティアグループとの共催だ
ったが、現在は同グループ主催で続
いている。

ということを教わりました。気持ち落ち込んだ時は風呂にも入れなかった。でも外に出て人に会うときは風呂に入って髭も剃って身だしなみを調える。そうすると気持ちも上がって、前は苦手だった若い人にも挨拶するようになりました」

同じく統合失調症を抱える田中孝治さんは当初「みんなとうまくできるか」不安があったという。「でも、哲学とか宗教にも興味があったので、佐野さんがいてくれて自然とありがたいなと思って。だんだん知らなかった地域の人たちとも関わりを持てるようになって、すごく勉強になりました」

震度7の厚真町で 自分にできることを

カフェの活動が大きく動いたのは2018年のことだった。9月6日の午前3時7分に起きた北海道胆振東部地震。震源地の厚真町では北海道で初めて観測された震度7を記録した。このとき、高田さんたちは思い切った行動に出る。

「医療従事者である僕らや佐野さんはもちろんですが、当事者メンバーにも現地であることを手伝



1 厚真町からボランティアのお礼に送られた感謝状。2 東日本大震災で話題になった「ど根性ひまわり」の種が厚真町で開花した。採取した種とその物語を綴った絵本も贈られ、えりもの小学校や幼稚園に配られた。3 佐野住職は「診療所のスタッフがどなたも楽しそうに働いている。人に恵まれました」と感謝を口にする。4 札幌出身の柳さん。5 えりも町出身の田中さん。6 愛知県出身の水野さんは、親友の田中さんに借金ができるまでに。

ってもらえないかと思ったんです。話をしたら、『やりたい』と言ってくれた。その気持ちがうれしかったです」

現地で活動するボランティア組織「オープンジャパン」に相談したところ、即歓迎してくれたことにも勇気づけられた。「断られても不思議ではないところを、『一緒にやりましょう！』と迷いがなかった。すごい人たちです」と高田さんは振り返る。

そして迎えた当日、オープンジ

ヤパンや自治体の人々、宗派を超えた宗教者たちが支援に走り回る姿を目にした田中さん。

「自分は病気で、みんなと一緒にやられることがある。自分の両親は亡くなっていますが、同じような年の人たちとお話をしたりして、少しでも元気になってもらえたらいいなと思いました」

行き場のない悲しみやどうしようもなく落ち込んでしまう苦しさや他人事ではない田中さんたちだからこそ、寄り添えるものがあつ

たようだ。本人たちの中にも自信が芽生え、被災地支援を機に活動の場が一気に拡大。近隣の町に不登校の子がいれば会いに行き、高齢者の地域ボランティアも買って出た。冬の雪かき時期には、診療所や町のみんなから大層頼りにされているという。

「僕は、自分が一生入院しているのかなと思ってました」と語るのには、当事者メンバー中、最も言葉数が少なかった水野琢磨さんだ。

「僕はあまり活動していないんで

すが……」と誠実に答えてくれる水野さんの姿に、佐野住職は「私はね、この人がカフェにいてくれることがすごいと思うんですよね。無理に話さなくてもいいんです」とニコニコ顔。病棟時代の水野さんを知る看護師の塚田さんも「水野さんはよく布団の中にもぐり込んで、目を合わせるのもひと苦労でした。それがこうして今日の取材にも出てきてくれた。みんな、見違えるようです」とうれしそうに3人を見つめていた。

小規模多機能型居宅介護事業所「いろり」。町の助成も得て、佐野住職の檀家が住んでいた木造二階建ての家屋を買い取り、リフォーム。訪問介護やデイケア、子どもたちの居場所としても機能している。



借金でも壊れない友情物語 新たな居場所も誕生

置かれている状況や地域が抱える課題は深刻だが、カフェ・デ・モンクえりもにはいつも笑いが絶えない。「文句」や軽口を言い合える対等な関係性ができているからだ。田中さんと水野さんは食べ歩きやドライブに出かける親友同士。徐々に活動範囲が広がる中、水野さんが借金をしたという話が高田さんたちの耳に入ってきた。「他の支援者だったらお金の使い方や金銭管理能力を心配します。でも僕たちは『よくやった』と喜んだ」と高田さんが笑えば、「そうそう、そこまで回復したんだと感心しちゃった」と塚田さんも相槌を打つ。そして高田さんの話の続きがまた面白い。「しかも借金の相手が親友の田中さんで、その返済が遅れて困った田中さんが生活保護を申請しようかと相談に来てくれたことで発覚したんです（笑）。その後は水野さんと呼んで一緒に返済計画を立てましたが、何よりすごいのはそれでも二人の友情は壊れないんです。この価値観は健常の世界ではありえない。柳さんも元介護士ですから人の面倒を見るのがすごく上手。僕ら

はよく『自分で自分の面倒を見る』ことができて初めて人のことを気にかけられる」と言いますが、人の面倒を見ることで輝く人たちもいる。それは医療従事者だけではできないことなんです」

カフェでは「えりも町がどんな町になつたらいいか」を話し合う地域デザインミーティングも開いた。昆布漁で元気に働いていた高齢者が、認知症になった途端に町外の施設に入るしか選択肢がないのが現状だ。町全体が自宅以外の行き場を求めていることも話題にあがった。それらの課題を全て受け止める場として2019年3月、山と海が見える場所に小規模多機能型居宅介護事業所「いろり」を開設した。

えりもではなぜここまで活動が活発なのか。高田さんの答えは、「まずは柳さんたち当事者の力の

INFORMATION

カフェ・デ・モンク

東日本大震災の被災地で僧侶たちがケーキとコーヒーを無償提供し、心身を休める空間で人々の声に耳を傾けた。その後も北海道や関西など全国10カ所以上で展開され、この傾聴活動の延長で東北大学を拠点に「臨床宗教師」という民間資格が誕生した。

DATA

カフェ・デ・モンクえりも

〒北海道幌泉郡えりも町
本町23番地（法光寺内）
☎090-8709-4687（佐野住職）

事務局・浦河ひがし町診療所

〒北海道浦河郡浦河町東町ちのみ1-1-1
☎0146-22-7800
<http://www4.plala.or.jp/hokoji/>

カフェは第4水曜に開催。メンバーには牧師もあり、町内の女性ボランティアグループや町の保健福祉課のサポートも受けている。



えりもの地元企業、坂田組土建（株）の協力で、ハウスで野菜を育てる農福連携も始まった。今年度からカフェも同社の笛舞土砂ヤード内（旧ファームレストラン）で開催されている。

積み重ねがあったことと、地域の課題が山積みだったことがかえって幸いしたと思います。みんなが困っているから、みんなで知恵を出し合い、笑い合う」
えりものモンク、佐野住職はカフェに関わってから改めて実感した傾聴の難しさを口にした。「聞こう、支えようと心掛けても無理が出る。それよりも私は一緒にいるとか、一緒に楽しいことをする。そういう自然なお付き合いの中で出てきた言葉をこれからも大切に拾っていこうと思います」